

ない体は激しい労働と耐寒に徹底的にすりへらされたものである。

寒いことを書いたついでにもう一つ。収容所の便所は大小便共にみな七、八人一緒に入れる仕切りのないものである。はじめのうちはとてもきまりが悪くて中々用便も足すことができなかったが、慣れてくると親しみのあるものになった。両隣の戦友たちと故郷のこと、彼女のことなど話しながら、自由な時間を楽しんだ。もちろん、余りゆつくりしていると、全身震えるように冷たくなってしまうが、排便はだんだん高く積もってピラミッド状に凍っていった。だから便所の掃除といえば、凍りついて石のようになったものを鉄棒で打ち砕いて捨てることだった。全然臭くもないし、きれいな仕事である。ただ五、六月になって雪が溶けはじめると、捨てた岩石が正体を現わして処置に困ったものである。

今年もまた、ナホトカから引き揚げて舞鶴に上陸したあの十一月十日がくる。思い起こすと、祖国の山々は美しく、そして白い米の飯がおいしかったこと。

あれから五十年、迎えてくれた父母はいないが、世は平成となり、こうして平和な日を送っていることは本当にありがたいことである。そして私にとってシベリアの生活は今になって望んでもできない貴重な体験の一つである。

しかしながら北海の怒涛の中、戦いに散った幾多の戦友、あのシベリア極寒の地で、飢えと厳しい労働に栄養失調で眠るように亡くなった多くの同胞の冥福を祈る昨今である。

シベリア抑留生活のあらまし

愛知県 横井 孝

まえがき

思い出せば、昭和二十年八月十五日正午、今は亡き昭和天皇の無条件降伏の放送がありました。当時、私は満州ハルビン第三六六部隊查形隊（教育隊）に所属、そこでソ連兵の武装解除を受けて牡丹江に向かいました。

た。ソ満国境を経てシベリア本線にてハバロフスク、イルクーツク、チタを經由してタイセツトに着きました。第五收容所に移動、そこで身体検査を受けてさらに第十七收容所に護送されました。そこが私のシベリヤ抑留生活の第一歩でした。

抑留中の作業内容について

目的は鉄道建設であります。伐採、搬出、木の根の破壊（ダイナマイト使用）、鉄道用地の完成、火力発電所の建設、枕木の作成等、大体の作業順序です。そして收容所ごとに六里ずつ完成すること。作業時間は七時から十七時ころまで。ただし割り当てられた作業が終了すればいつでも帰る。終了しない場合は終わるまで続行する。私も二十三時ころ帰った記憶がありません。なお、鉄道建設作業者は一級者と二級者、三級者は收容所内の清掃等、四級者は就寝許可、体力によって四級に分かれております。温度については、零下三〇度以上は戶外作業中止です。零下三〇度以上は、所内の清掃、暖房用の薪取りなど。また積雪は大体一メートルから二メートルくらい。毎日休むことなく働く。

これが捕虜生活の掟です。

私も三級者になり、将校当番を四カ月ほど務めました。その間に体力が付き、間もなくダモイ（帰国）の命令が出ました。ソ連将校も「ハラシヨ、ハラシヨ」といつて角砂糖を沢山くれました（万一、死亡していれば、来年五〇回忌です）。

一日の食事について

朝食は高粱（コリアン皮付き）と塩鮭とを一緒に炊き込んだものを飯盒の外蓋に一杯と三分の一くらい。昼食は黒パン三五〇グラム一個、スープ飯盒に三分の一くらい、燕麦は中飯盒に一杯（作業場で食べる）。夕食は朝食と同じくらいです。コリアン食とか黒パンは、とても渋くて食べられません。といつて食べないわけにはいきません。それしかない。これが大体一日の標準食です。しかし、その日の作業能率によって、各食事が増減されます（一級者と二級者）。

要するに、働かざるものは食うべからず。三級者の食事は、白パン（ポミーを粉にして作ったもの）とスープと粟飯（小鳥の餌）、夕食は燕麦飯（馬の餌）

中盒に一杯。四級者の食事は分らない。味については塩味または甜味であります。したがって栄養はほとんどありません。栄養失調者が多くでした。

言葉

ラポーター 労働者

ラポートカンチャイ 作業終わり

ハラシヨ よろしい

ニエハラシヨ よくない

このような言葉があります。シベリアに抑留された方はご存じと思います。

最後に私が印象に残ったこと一つ。

これは発電所の近くで、作業終了後一本の鉄の丸棒、太さは三分でした。その鉄棒を、両端に石を置いてその上に乗せて、真ん中でボンと叩いたと同時に二つに折れました。私はもちろん、戦友もびっくりしました。こんなことは信じられません。いつ捨てた鉄棒か分かりませんが、話を想像しますと、鉄の素質がなくなり芯まで凍っている。氷になってしまった。氷は脆いも

のです。

わたしも二年間の捕虜生活をしてきましたが、零下四〇度という酷寒を記憶しております。十月より三月初ころまでは零下二〇度前後ではないでしょうか。とにかく凍らないものは何ひとつないと思います。

【解説】

筆者の終戦時所属部隊満州ハルビン第三六六部隊とあるのは関東軍技術教育隊で徳一三九九八部隊とも称されている。隊長・杏形節一少佐

タイセツト地区における推定死亡人数は三千二百人で他地区より多いのは作業の主体が第二シベリア鉄道建設にあつたことによる。枕木一本に死者一人の割合で死者が出たといわれている。

タイセツト地区に収容された日本軍捕虜は約四万人余りで、主に東部満州の戦場でソ連軍と交戦した部隊が多い。

タイセツトはシベリア鉄道本線の分岐点で、新設された第二シベリア鉄道（バム鉄道）の起点地区で、バ

イカル湖の北西方に当たる。このバム鉄道は独ソ戦のため中断されており、ソ連はその工事促進のため一キロ当たり一五〇人の日本兵を投入したが、零下四〇度を超す酷寒と貧しい食事のため栄養失調による死者が続出し、魔のバム鉄道と怖れられた。

タイセツト地区に抑留された部隊は次のとおりであった。

関東軍司令部、第一方面軍直轄部隊、以下第三方面軍、第三軍、第四軍、第五軍、第三〇軍、第四四軍の各直轄部隊。第二航空軍、大陸鉄道隊、第一二二師団、第一二四師団、第一二六師団、第一二八師団、第一三六師団、第一三九師団、第一四九師団。

一九九一年四月発表の死亡者名簿によると、この地区の収容所数は四十八で、死亡者二、六二二人となっている。下士官、兵のみで将校は分離されたのか一人もいない。